



スウェーデンにおけるフィンランド移民：
異文化間のステレオタイプ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-05-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 塚田, 秀雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004583

スウェーデンにおけるフィンランド移民

— 異文化間のステレオタイプ —

塚田 秀雄

一 はじめに

スウェーデンの異文化体験 スウェーデンという国家あるいはその国民または民族はもちろん歴史上多様な異文化体験を蓄積し、そのことによって自らの文化を形成し他の文化にも影響を与えてきた。ヴァイキング時代や近代化過程におけるヨーロッパ諸国との交流がこれを示している。特に、十六世紀に現在のオランダ、ベルギー地域から製鉄・鉄鋼業の技術移転の目的で招致されたワロンや十九世紀の産業革命初期にしきりに活動したスコットランド人の企業家はこの国の経済の近代化に大いに貢献し、スウェーデンの社会も円滑にそのもたらしたものを受容してきた。ドイツの文化的影響の大きさは言うまでもない。¹⁾

第二次大戦後のこの国の経済成長は一九六〇年代から七〇年代にかけて、大量の外国人労働者の流入を必要としたが、伝統的に労働力供給源として依存してきたフィンランドだけではなく、南ヨーロッパや近東地域からの流入が急増したことにより、スウェーデン人は、異質の文化に直接接することである種のカルチュア・ショックを受けたと言える。同時に慣れ親しんできたはずのフィン人のあり方についても眼を開いた感がある。移民を単に労働力源として見るのではなく、文化を担うものとして見ざるを得なくなった。²⁾

フィンランドからスウェーデンへの移動 十一世紀のスウェーデン十字軍のフィンランド遠征、キリスト教化以後、一八〇九年の対ロシア割譲まで、フィンランドはスウェーデン王国の一部であった。フィン語は教会用語としては早くから認められていたが、政治の場

ではスウェーデン語が優先し、フィンランド域内での経済的な力は西部、南部の沿岸地域に住むスウェーデン系住民に独占されていた。十九世紀に民族主義運動が盛んになった時には、スウェーデン系とフィン系の言語紛争が起こったが、両語が公用語として認められ、一九一七年のロシアからのフィンランド独立以後も同様である。しかし、第二次大戦後はフィンランド国内におけるスウェーデン語系の割合は6%程度に低下している。その一因は、スウェーデン語系住民のスウェーデンへの移住が多いことにある。³⁾

言語紛争の際に、スウェーデン民族主義者の中には、フィン語は未開・野蛮な言語であり、高度の文化を担い得ないと極言する者もあった。

スウェーデン領内には、フィン人の集団またはその名残りが3類型、3地方に認められる。①フィンランドとの国境地帯であるトルネ河谷「Tornedal」は元来フィン語地域であったから現在でも多くのフィン語を話す住民が住む。②スウェーデン中西部の森林地域には十六世紀に、開墾のために焼畑技術に優れたフィンランド農民がサヴォ地方から移住し、その後も長くフィン文化を維持し、いわゆるフィン地域「Finbygden」を形成してきた。⁴⁾ これらの地域では、二十世紀になってもなおフィン語を話す者がいたが、現在ではスウェーデン化が完了している。③第二次大戦後、両国間の経済的格差によっ

て、大量のフィン人労働力がスウェーデンの工業地域を中心に移住してきた。本稿で扱うのは、③の類型、地域のフィン人とそれを包むスウェーデン社会の環境である。⁵⁾

問題の所在 スウェーデンは他の北欧諸国と北欧理事会を結成する他、多くの機構を設立して、密接な関係を維持しており、フィンランドとの関係も例外ではない。しかし、フィンランドの場合、他の4国の言語が北方ゲルマン語であるのとは異なり、フィン・ウグル語系に属することで、その歴史的關係と良好な外交関係にも関わらず、北欧諸国間でよく言われる「兄弟国」の感覚には、スウェーデンから見て違和感があることは否めない。⁶⁾

両国は相互に相手国内に少数民族として居住する同胞を持つ。国内の少数民族の経済・社会環境については、行政的な観点からは手厚い対策が取られており、そこには北欧共同労働市場制に基づく就労機会の平等等の経済的、社会的平等が指向されている。しかし、国家レベルでの関係と市民レベルでの関係は平行するものではない。両国の市民レベルでの文化交流・相互理解は十分とは考えられず、違和感は市民レベルで強く感じられる。⁷⁾

問題は、例えば、両民族が持ち合う相手に対するステレオタイプに見られる。根拠のない作り話に基づくものもあれば、経験的にもっともだと思わせるものもある。多数のフィン人がスウェーデン国内

に居住し、日常的に接触する機会が増大した今日、このステレオタイプは克服されなければならないものを含んでいる。

そのステレオタイプの形成については、工業化、都市化社会についての価値基準の差があるように思われる。労働力として流入した人間が、労働を提供し対価として賃金を受け取るという関係だけではなく、それぞれの行動規範を持ち、これがスウェーデン社会の規範と抵触するかに見える時、スウェーデン人は、半ば当然であるが、自分たちの規範、自分たちの価値基準がその社会における唯一のものとして確認しようとする。その結果、民族中心主義的 ethnocentric なステレオタイプが形成されると考えられる。⁸⁾

手順と方法 以下の各章では、二相互のステレオタイプ、三民族性の比較、四スウェーデン社会に内在するステレオタイプの要因、の順に資料を提示し考察を進める。

この考察にあたって、スウェーデンとフィンランド両国のヨーロッパ圏内における時間的、空間的状況とその変化が基本的な枠組みとなり、それに起因する、特にスウェーデン社会の特質が、その異文化に対する態度あるいは対応を規定するという仮設の妥当性を問いたい。他方、国の政策あるいは対策としての異文化に対する態度ではなく、個々の市民がどのような意識を持ち、どのような態度を示すかということの問題とする。公的な態度と私的な態度に違いがあ

るといふ仮設の証明も必要となる。

二 相互のステレオタイプ

ステレオタイプの定義 リップマン Lippman, Walter が最初にこの語を用いてから、様々な用法が出現し、その定義は明確ではない。⁹⁾

①集団の成員がその成員であるが故に、内的、外的特質を持つと信じ込み、個人の持つ個性で判断されずに属する集団の代表として評価される場合、事実とは一致せずに過度の一般化がある(Allport)。これに対し、②ステレオタイプにはある種の事実が含まれているが過度の一般化と誇張があるという考えも存在する。¹⁰⁾

事実を含むか含まないかという点で対立する両者に共通するのは、過度の一般化があるという点である。①の場合は集団の成員一人づつの個性を見なければならぬという立場から、集団の一般的傾向については無視する点があり、一般的傾向を得るのは困難になる。

この場合、ステレオタイプは非論理的な思考の結果であり、信頼し難い情報に基づくものといえる(Kimberly)が、全くの嘘言に基づく誤解、曲解は別に扱うべきである。②の場合は、互いにステレオタイプを相手に対して持つ民族集団の間には、実際に社会経済的な差が存在し、拡大されているにしても、ステレオタイプはその差

を反映するものである。ここでは、集団の一般的性向について論ずることに問題はない。

異文化に接する時の姿勢について論ずる場合、多くの人に明確な嘘言、あるいは笑い話ないし小話として処理されるような内容はステレオタイプとは考えず、あるいはあり得る話とか全体としては容認できることを個人の必然性として考えた結果をステレオタイプというべきである。

集団の成員はその成員であるが故の特質を持たないだろうか。共通の特質を持つから成員となるのではないか。ただ厳密にその集団の基本的性格のみを論ずるならば、例えば、フィン人とはフィンランドの国籍を持つ者とした場合、フィン語を母語とする者と必ずしも一致しない。従って、ステレオタイプとされるものごとの認識については、集団にはその多くの成員が具有する性向があるが、その性向がなくともその集団の成員であり得る場合が多いことを前提として、集団を論ずるべきである。

ステレオタイプは、より包括的な民族中心主義的症候群の一部であるとすると説¹⁾によれば、ステレオタイプ化の基盤は、WE集団の価値観にあり、それを別の価値観を持つあるいは持つかも知れない外部集団に適用することによりステレオタイプが形成されるとする。この場合、WE集団の価値観のあり方がステレオタイプ形成に寄与

し、ステレオタイプの内容や方向をも規定すると考えられる。すなわちWE集団が強い基準を持つ場合には、これからの逸脱はステレオタイプの形成に通じ易いし、その内容は自分たちの価値基準から見て否定的なものになる。

フィン人についてのステレオタイプ スウェーデンで一般に想起されるフィン人についてのステレオタイプは、*kniv, spirit, snus*、である²⁾。これを「ナイフ、焼酎、根性」と仮に訳しておく。ナイフは、かつてフィン人が日常的に携行していた森の中の生活用具であるが、ここでは喧嘩、傷害あるいは暴力を意味している。焼酎としたが、スウェーデン語で火酒のことで、フィン人のアルコール好きを指す。*snus*はフィン人自身が自らの民族性として誇りにするもので、不屈の闘魂、強情、スタミナなど意味するところは複雑で、例えば、度重なるソ連の主権侵害に対し、フィン人が勇敢に抵抗したのは彼らの*snus*のなせる業であると言われるのである。

スウェーデン人がフィン人について考える場合、この3点が完全に融合しており、「酒に酔って喧嘩をし始めたらおさまらない」ことになる。実際には、日常的にナイフを携行するフィン人はいないし、アルコールの消費統計はフィン人について、さほど高くはない。国民性を肯定する立場から、フィン人について、「真のフィン人が控えめな態度を捨てるのは、手にアルコールの一壘を持ち、その内

容の相当量が彼の胃の中に納まった時である」と言われる。「一般に言われる」、「噂によれば」などというのは、論証を欠く典型的なステレオタイプ例であるが、相当数の人間について事実であるといえる。「フィン人は権威を重んずる」とか「馬鹿にされた場合、一旦激すると納まりがつかない」というのも同様である。

フィン語がスウェーデン人にとって習得が絶望的に困難な言語とされていることが、スウェーデン人から見たフィンランドとスウェーデンとの間の距離感の重要な要素である。音楽的アクセントと呼ばれるスウェーデン語のイントネーションと常に語頭または文頭にアクセントがあるフィン語のそれとは極端な相違を示す。更にフィンランドからの移民中に多かったスウェーデン語系フィン人 *Finlands svorskar* が話すスウェーデン語のイントネーションが完全にフィン語化されているために、スウェーデン人の耳には奇異に聞こえることが、不可解な民族というステレオタイプを生むことに寄与している。¹³⁾

「フィン人は共同住宅の室内に砂場を作って子供を遊ばせ、台所をサウナ室にし、隣り合う二戸が一台の電話を共用するために、壁に穴をあける。床に穴をうがってそこでポテトを栽培し、バルコニーでブタを屠殺し、浴槽でその塩づけをつくる」

「フィン人は衣装室に電熱器や鍋を持ち込んでサウナ室にしてい

る。係員が共同住宅で衣装室のそのような利用は禁止されていると言くと、浴室で使えたいところだが、浴室は屠殺したブタを置いてあるから使えない」と言ったなどというのは、そのこと自体はステレオタイプではなく、ヨーロッパに多い「小話」の類であるが、その根底には、ステレオタイプがあり、移民について「原始的、馬鹿、愚直、貧乏」という過度の一般化を伴う思い込みがこのような小話の流布の前提になっている。同時に実際には自分は知らない移民の故郷との連想で、移民は近代社会には適応困難であるという決め付けがある。¹⁴⁾

実際には、上記の小話は移民一般について、時々固有名詞を入れ替えながら言われるものであり、しかもかつては、スウェーデン国内の北部等の周辺地域から都市に移住した者について全く同様のことが言われた根拠のないものであり、そのように理屈の上では理解していないながら、ステレオタイプの再生産の重要な一因となっている。¹⁵⁾

フィン人移民の状況 一九六九—一九七〇年に頂点に達したフィンランドからスウェーデンへの第二次大戦後の移民は、両国間の所得格差が原因となり、労働力の移動の自由が確立されたことで増大した。一九五〇年代までは農林業へその後工業分野の労働力として、一般に低学歴、非熟練労働力が流入した。フィンランドの経済発展により、現在では、むしろスウェーデンに定住していたフィン人が

故国に還流する動きも顕著である。¹⁶⁾

スウェーデンでのフィン人移民労働者が定住する地域はその労働の性格から、現在ではストックホルムとメーラレン湖周辺ならびにイエーテボリ、ベルイスラーゲンの工業中心に集中している。それらの地域で居住地域についての差別もしくは民族的な集住の有無について、例えば、ストックホルム都市圏では、スポンガSpånga、チスタKista等に、イエーテボリ都市圏では、ビショッパスゴードンBiskopsgårdenとベルシエン||ゴードステンスベリエトBergsjön、Gårdsensbergetへのフィン系住民の集住が知られている。これらについて、スウェーデン側の報告では、移民の流入時期が同じ頃に集中し、住宅需要も集中したこと、都心近くのスラム化しつつあった住宅よりも、当時開発が進められていた郊外の低賃で近代的な集合住宅が選択されたとされている。

しかし、フィン人の集住については、企業による組織的労働力募集とそれに伴う企業が準備した住宅への入居という要因や、いわゆる縁故移民の場合、住宅事情が深刻なストックホルム等大都市地域では、まず情報提供者である縁故者の部屋に同居し、その近辺に部屋を見付けてさしあたりの住居とするという要因がある。

第一世代については、言語の問題もあり、未婚の移動性の大きい層ということもあって偏った地域の集合住宅に住むが、第二世代以

降には、スウェーデン化の進行と共に、持ち家、一戸建へと進み、それと共に全域への拡散が一般的である。¹⁷⁾

集住については、スウェーデン社会との調和、民族文化の維持という対立する可能性のある二つの課題にとって重大な関係があるが、住居選択の自由の結果であるにしろ、一部地域のごとくフィン人の比率が高くなると、そのことが偏見を生む原因とも言われる。

フィン人移民青年と同世代のスウェーデン人青年についての、労働、経済、住居、健康、生活の安定性、余暇、家族等の比較調査によれば、いずれの項目についてもフィン人青年に低い結果が得られたとする報告もある。政治的には左派の支持者の比率が高く、社会生活に対する不満は存在する。¹⁸⁾

スウェーデンの社会政策は移民の文化の尊重、複合文化国家への進化を目指しており、フィン人に限らず、母語による教育機会は重視されている。しかし、移民がこの国で最低限の満足を得るためには、スウェーデン語の習得、スウェーデン社会への適応は不可欠の条件である。本来スウェーデン語能力を持たないままに、それをあまり必要としない職種についた教育水準の低い一部のフィン人青年は、集住することによりフィン語による限られた社会空間での生活が可能になるために、適応動機と適応機会を小さくしている。

複合文化国家を指向するのは、移民が個人のレヴェルで複合文化

を具現することが期待されるのであり、単一の文化のみを維持した移民が移民先国内で満足することは不可能であろう。

フィン人の意識 フィンランド国民は、フィンランドとスウェーデンの歴史的関係に由来する対スウェーデンの特別な民族意識を持っていると考えてよい。ロシア支配下の十九世紀の民族主義運動の中で形成されたこの意識は、言語を通じた文化の差異の認識に発している。自らの文化の独自性の認識は、同程度に強く、スウェーデンの文化的影響を自覚することでもあった。スウェーデンの一部としてその機構内に組み込まれ、常に非支配の立場に立たされていた。フィンランド国内のスウェーデン語系住民の比率は低下したが、その経済的な力は依然として大きいものがあり、文化面での比重も大きい。スウェーデン語系住民の出自は、スウェーデンからの過去の入植者とバルト海沿岸諸国からの移住者だけでなく、本来フィン語を母語とした者が十九世紀までにスウェーデン語化した者も含んでいる。¹⁹

フィンランドの近代化がヨーロッパ先進地域の影響の結果であり、それがスウェーデンを通じて行われたことをフィン人は自覚しているから、スウェーデン⇨先進、フィンランド⇨後進という図式がフィン人の考えの中に成立しており、これはスウェーデン人の中にもステレオタイプとして固定化している。

フィン人はこの観念を放棄できないままにスウェーデンに移住する。これは憧憬と反発を併せ持つことになり、適応、不適応の行方を左右する。フィン人は両極端の傾向を示すというのもステレオタイプであるが、例えば、一人当たり国内総生産でフィンランドがスウェーデンを凌駕するに至った近年、スウェーデンからフィンランドへの還流移動が急増する一方で、スウェーデン国籍を取得する者も増大している。²⁰ いうまでもなく経済的動機による移動が最大の要素であるが、還流するか帰化するかを分ける要因として、フィン人のスウェーデンに対する上記の認識がある。

フィン人は、急激に移民社会に変化したスウェーデン国内において自らを特殊な存在と考える面がある。一九七〇年代までに急増した南ヨーロッパからの移民とは異なり、フィンランドはスウェーデンと歴史的関係があり、労働力移動は過去も共同労働市場内の現在も国境によって隔てられるものではないこと、生活習慣においてスウェーデンと大差ないこと、経済的に既に先進国となっていることなどから、南ヨーロッパ諸国からの移民と同日に論じられるべきではないと考えている。実際には、就労だけではなく、帰化等についてもフィン人は他の北欧諸国と並んで優遇されているが、スウェーデン市民の間で、フィン語を話すことでフィン人が遠い存在となるという文化の問題があらう。

スウェーデンについてのステレオタイプ スウェーデン人の行動や思考の特性については数多く語られているが、スウェーデンへの移民について、スウェーデン人が語るのとはは話題の性格がやや異なっている。小話を集成した例を挙げる。「約八〇〇万人のスウェーデン国民は皆が長身、金髪、碧眼で社会主義者である。彼らは一日中異性と交わるが、決まった間隔で火酒を飲む。その後、彼らは効率的かつ正直に働き、莫大な賃金を得る。これが退屈でならないので自殺する」といった類の小話は数多い。移民についての話が、近代社会ではあり得ないような行動パターンからなるものが多いのに対し、スウェーデン人についての話はスウェーデン人があまりに合理的、主観的、効率主義的であることを笑うものがほとんどである。移民がスウェーデンについて持つステレオタイプは、エーンによれば、大きく四つに区分される。一 主人としての意識、二 外国人敵視、三 社会的に閉鎖的、四 精神的に空虚 の四点である。²⁾

スウェーデンの主人はスウェーデン人であるという意識は一見当然のように思われるが、移民側からは「上層、特権的、多数派のスウェーデン人——下層、不幸、少数派の移民」という図式の固定があると考ええる。スウェーデン政府が行う多様な移民政策は高水準に達している。スウェーデン人の間で、移民を「泥棒」、「スウェーデン人の達成した社会的資産を移民が利用する」、「居候」と考え

るかのように、移民の側で感じているところがあるとすれば、その原因は何よりもスウェーデン政府の厚い移民対策であろう。その精神的な被害意識を生むのは、移民の側の消極的、卑屈、被命令者の立場の意識とスウェーデン人側の一部に見え隠れする *we group* の意識が相乗された結果と考えられる。

外国人敵視はスウェーデン人の心の奥深く潜んでいると移民は考える。自分たちが達成した最良の社会システムの質を維持するのに移民は障害要因となるとスウェーデン人が考え、スウェーデン人は移民とその社会的背景について無理解であり、スウェーデンが達成したもののへの移民の貢献を無視しようとしていると感ずる移民は多い。

以上の2点については、南欧からの移民だけではなくフィン人移民も同様のステレオタイプを形成している。フィン人移民の職種を一瞥すれば、その構成がスウェーデン人と他の移民の間にあることは明らかである。フィン人移民の間で、南欧や近東出身の移民に対する優越意識と併せてスウェーデン社会に対する不満が融合するのである。

社会的に閉鎖的かつ内向的なスウェーデン人というのは、ほとんど全ての外国人が持つ印象であるが、多くの場合一旦信頼関係ができあがると、スウェーデン人も決して閉鎖的ではないというものし

ばしば言われることである。²⁰⁾この点について、移民に限った発言では、スウェーデン人は移民との接触を避けるし、移民もスウェーデン人と接触して楽しむことがないから接触したがない。地中海周辺の世界では、血縁関係、友人関係がはるかに濃密であり、その社交が大きな喜びであるのに、「スウェーデン人は仕事が終わって家に走り帰るとドアに鍵をかけて翌朝の出勤時まで顔を出さない」から、何が楽しくて生きているのかということになる。²¹⁾

フィン人は特に外国人について大きいホスピタリティを示す反面、自国民に対してそれほどでもない性向があるから、スウェーデン人の外国人に対するある種の冷淡さについては否定的であるが、スウェーデン人の社会的性格そのもの例えば、冷静さ、寡黙といった点については、自分たちとの気質の違いは認識していても、これを積極的に否定するような南欧人とは異なる態度を持つ。

精神的に空虚なスウェーデン人というのは、「私は忘れられた老人になりたくない。私が死んだ後六か月も経って私の死体が発見され、私が最後の家賃を払ってないことがコンピューターに記録されているなんて」という孤独や計算機管理のスウェーデン社会に対する恐怖を感じる移民からのステレオタイプである。精神的遺産を軽視する、学校は倉庫に過ぎず、恋愛は愛するふりをするだけ、子供の養育はひどい状態にあるという認識がそのように言わしめてい

る。²²⁾

この近代化、工業化の持つ側面について、フィン人は南欧からの移民ほどスウェーデンを否定的には見ていない。フィンランド自身が多少のタイムラグを悔やみながら常にスウェーデンに追随してきたのはこの点である。前方を進むスウェーデンが示す問題点は認識し、できればこれを回避しようと努めながら、結局はほぼ同じ道を進むフィン人にとって精神的に空虚という問題は経済発展の蔭に隠れている。

スウェーデン人の意識 スウェーデン人が日常生活において最も重視する規範は *sunt förnuft* であろう。健全な良識と訳せる。近代化過程でスウェーデン人の価値観は、それまでの農村社会的なものから市民社会的なものへ大きく転換したと言われるが、超「近代的」な基準あるいは無基準が強くなっているとはいえず、「近代的」か否かということが一般のスウェーデン市民にとっての判断の基準であると言える。その「近代的」であることの内容は大きく区分して、・民主主義・平等・合理主義・平和の四点に集約される。いわば、常にこれらの基準を遵守する姿勢が *sunt förnuft* である。²³⁾ 民主主義や平等の概念が家族、男女、年齢、職業等さまざまな邊りを超えて拡大、浸透するべきであるというスウェーデン人の信念は、移民の出身社会の構造、基準に適合しない面が多いし、適合す

るはずがないとスウェーデン人は考えているところがあり、ここに自分たちの単一の基準を堅持し、移民に対しては譲れぬ点として同化を期待する。

合理主義に対する信奉はスウェーデン社会を頑ななものにする可能性がある。精神的なもの、人間の心理によって左右され、個々人のありかたによって変動するような存在は不安定であるから、個人の領域に委ねられていることを少なくし、社会全体が目的に適ったシステムになるためには、合理性という自然科学的、経済学的な一元的原理に基づく社会を人間が作り上げねばならないという意識がスウェーデン人にはあると考えられる。

人間の行動を全て合目的なものとするという指向は目的に合わないことはしないことに通じ、もし豊かで多様な人間関係、複雑で悲喜交々な人生を目的としないならばこれを否定し、単純明快に割り切れる社会を構築するために努力することになる。移民の多くが指摘するスウェーデン社会の非人間性、精神的な空虚ということとは、スウェーデン人がはじめに考え、彼らの理想の実現にむかって努力する姿勢と通底する。

この項に述べたことは、まさに筆者が抱いているスウェーデンについてのステレオタイプに基づいているから、筆者はステレオタイプ一般を否定することはできなくなった。

三 民族性の比較

パースナリティーと民族性 民族性と一般に言われるものは客観的な測定が困難で、必ずしも事実と合致しないステレオタイプであることが多い。しかし全面的に事実と反するのではなく、ある民族に属する個人のあり方について、その民族について一般的に言われることと符合することも多々あって、首肯させられることが多いことも事実である。ここではスウェーデンとフィンランドの民族性を比較しようとするのであるが、例えば、フィン人はAの特徴を持っているという場合、身体的特徴はもちろん、行動の特徴であっても、一〇〇%そうである訳ではなく、せいぜいかなり多くのフィン人がAの特徴を示すに過ぎない場合が多く、それは僅かに三〇%でもそのように言われる可能性がある。要するに過度の一般化が行われる。そのパーセンテージの大きさとステレオタイプの形成の関係を数値で示すことはできない。Aという特質は本来個人の特質であり、それが集団のかなりの成員にみられるために、一旦その集団の特質のごとく言われるとその特質を持たない残りの成員もその特質を具えるごとく言われるのである。

ここでは、ある集団の成員の何%がある特質を持つかを測定するという、パースナリティーの調査によってある民族にどのような特

質を持つ者が多いかという相対的な比較は可能である。例えば、スウェーデンとフィンランドを比較する場合、例え、ある特質を示す比率がそれぞれ三〇%と十五%という低率であっても、この点について、スウェーデンはフィンランドと比べてかなり顕著であるから、これは両者の違いとして有意ということになる。

テルフネ Terhune によれば、民族性とは民族内の個性のタイプの配分パターンすなわち個性のタイプの構成比であるとする。その場合、典型的なフィン人や典型的なスウェーデン人は存在しないことになる。民族性という概念はその民族の成員全てに共通するものではない。²⁸⁾

現実に民族間で、あるいは異文化間で相手に対してある概念が形成されるのは、ある現象について、民族の成員が示す相対的な比率の高低比較が主問題であり、パーセンテージの数値はむしろ問題として小さい。こちら側に対してはこちら側が高いか低いかによって、あちらの特性を決め付ける。その場合の基準は自民族中心主義的になる。

C M P S Cesarec-Marke Personlighetscheme スウェーデンの心理学者であるセザレックマルケが開発したパースナリティー調査法のひとつである。十一の枠組みに十五の設問を設けて個性を判断しようとするものであるが、対象を吟味して多数の被験者があれ

ば、民族性を判断する資料となり得ると考えられる。²⁹⁾

その枠組みあるいは範疇は以下のとおりである。一 達成と競争、二 帰属と交流、三 衝動的攻撃性、四 地位の保全と自我脆弱性、五 罪悪感、六 支配と指導、七 自己顕示と求心性、八 自立性、九 保護援助的地位、十 秩序・計画、十一 被保護慰撫。フィンランド第二の都市ツルクで一九八四―八六年に二十九―七十一才の約四〇〇人についてこの調査が行われた。目的は社会復帰の研究であった。スウェーデンではストックホルム周辺地域で一九七〇年に同様の目的で行われた調査で、被験者は十八―六十五才の約二二〇人であった。比較対照のためにそれぞれフィン語を母語とする者、スウェーデン語を母語とする者に限定し、年齢も調整して三七六人のフィン人と六六九人のスウェーデン人について集計したものである。回答は全て yes/no で行われ、母数に対するパーセントで結果が示されている。

ツルクとストックホルム周辺という二つの地域については、地域的人格は類似しており、問題はないと考えられるが、調査の実施時期が一九七〇年と一九八五年頃という点については、急激な変化を経験している時代であるから、情報の解釈にあたってはこれを考慮に入れなければならない。³⁰⁾

スウェーデン人とフィン人の個性の比較 一、達成の欲求と競争指

向については、例えば、「何か本当に意味のあることをしたいと思うか」(Q1)に対し、男女合計では、ハイの比率がスウェーデンで八十七%、フィンランドで六十%でかなり差がある。(以下スウェーデンⅡS、フィンランドⅡF)。「自分の成功のために、快適さの全部を供することができるか」(Q67)に対し、FⅡ三十、SⅡ四十九となり、スウェーデン人への傾向が大きいと言える。職業上の経歴や経済的向上に関して、フィン人はスウェーデン人よりも上昇指向が少なく、逆に一発大仕事を夢見るところがある。スウェーデン人にとってフィン人にとってよりも、競争心は人間行動の起動力として重要であり、他の調査で、フィン人にとってスウェーデン人にとってよりも、勤勉さが人間行動の重要な要素であることと併せて、スウェーデン人への変化への指向が大きいと言われる。フィン人は自分たちの生活の質について北欧諸国中で最大の不満を示しているが、上昇指向が小さいのはその可能性が小さいからであるとする説もある。³¹⁾

二、帰属と交流というカテゴリーでは、特に友人関係について両国の差が大きい。「長期間、友人と離れて問題はないか」(Q2)に対し、FmⅡ四十一%、SmⅡ七十%であり、「最良の友人と離れているとき、憂鬱、不幸になるか」(Q13)に対し、Noの回答がスウェーデンでの男性では、フィン人の男性よりも三十五%多かっ

た。明らかにスウェーデン人はフィン人よりも友人関係に依存する心理が弱い。これはスウェーデン社会が強い友人関係を必要としないう構造になっていることによると考えられ、1のカテゴリーの質問結果と併せれば、スウェーデン社会の近代性、フィンランド社会の伝統性という異なる特質が考えられる結果となる。スウェーデンはフィン人に比べて、「成員が互いに暖かい感情を持つ集団に属することが好き」(Q101)であり、「他人と個人的接触をたもつことに熱心」(Q134)である。³²⁾

三、衝動的攻撃性については、フィン人についてよく知られた偏見「フィン人はすぐに怒り、暴力的に燃え上がる」という性格がスウェーデン人よりは多いことが確認される。「自分を怒らせた人物に対し、直接の憎悪感をもつことがあるか」(Q113)に対し、FⅡ六十七%、SⅡ二十二%である。スウェーデン人については、紛争回避指向が強いことが言われるが、「人を緊張させるのが楽しいという理由で、さほど深刻でないことを言うか」(Q157)について、FⅡ三十四、SⅡ十九という結果は上記の設問に対する回答と並んで、その一般的に言われることの妥当性を明らかにしている。³³⁾

以下、各カテゴリーについての回答を簡単に紹介する。

四、立場の防衛 フィン人はスウェーデン人よりも他人の判断に依存し、自我がやや弱い。

五、罪悪感 フィン人はスウェーデン人よりも内面の規範が厳格で疾しい心という傾向に陥りやすい。フィン人は他の北歐人よりも人生を暗く、重く考えている。

六、支配の欲求 スウェーデン人は自分の競争力を知り、攻撃を受けることを避けようとするが、フィン人は自分の競争力をしらずに戦いを挑むところがある。フィンランドやノルウェーでは、「storsvenskhet」をスウェーデン人が自覚していると言われる。

これは「スウェーデンの偉大さ」意識ということであろう。「スウェーデンは世界の良心である」といった意識も同様で、スウェーデン人の支配欲求、指導性追求の現れとされる。

七、自己顕示欲 スウェーデン人は自己顕示指向が強く、他人から注目されることを好むが、フィン人はこれを嫌う点で対照的である。

八、自立性 両国民ともに自立の欲求はきわめて強いが、「自分の考えが多数と一致することが多いか」(Q107)について、F_{II} 211、S_{II} 445で大差がある。これはスウェーデン人の自立性の弱さを示すのではなく、スウェーデン人の集団性や規範一致性が大きいということと考えられている。

九、他者の世話・援助についての態度では、フィン人がスウェーデン人よりもやや強い傾向があるが、大差はない。

十、秩序・清潔・計画の必要性 共に高い数値を示すが、スウェーデン人はより計画的・組織的である。

十一、庇護、被援助、慰撫の必要性 スウェーデン人はフィン人よりも狭く深い友人関係をのぞむ傾向があるが、「自分が心配事をもち、困難な状況にあるとき、他人の参加、理解、信頼に関心を持つか」(Q143)の設問に対し、F_{II} 666、S_{II} 222で最大の差を示す。スウェーデン人は家族、フィン人は友人に依存する傾向がある。

以上、概略を示した調査結果は、客観的な個性の集積が、両国民についてあるいは両国民間で、一般にステレオタイプとしていわれることと一致する場合が多いことを明らかに示している。一致することはそれが真実であることではない。それは国民あるいは民族の成員に多い傾向を示すのであり、その民族の成員が全てその性質を持つのではないことも明らかである。ステレオタイプには過度の一般化と誇張がある。

四 おわりに

スウェーデン社会における外国人特にフィン人に対するステレオタイプの形成の要因について若干考察することで、まとめとした。スウェーデン人は自分たちの到達度に自身を持っている。それは、

まず経済的な成果であり、社会資本の充実に基礎をおく高度の都市生活、福祉社会の実現などについてであるが、これを成し遂げたのは、経済的発展の基礎に工業があり、それは、自分たちの勤勉さ以外に、合理的、計画的な資源利用や社会組織の形成によることを自覚している。

同時に、彼らがめざした平等で民主的な社会についても自信を深めており、要するに多くのスウェーデン人は、彼らが作り上げてきた社会が、他の多くの諸国に比べて先進的で、すぐれた点が多いと考えている。

イギリスを始めとする近代化については、十九世紀まで後進的でありながら、それらの先進国を、特に、合理的な社会組織の形成という点で凌駕しているという意識も、スウェーデン人は隠さない。一方で、自分たちのあり方についての不満も多いが、全体として、スウェーデン人は幸福を自覚してきたといえる。

スウェーデン人が幸福を信ずる限り、彼らが達成した社会・経済システムは最善のものとされる一方、彼らが内外の古いあり方を改革して現在を得たことで、止まることを知らない不断の変化・発展そのものに価値を見いだすことになる。

もちろん現在についてのこのような自信、未来信奉、発展の確信は不変のものであり得ず、一九八〇年代以降の経済的停滞は、自分

たちの到達したものに對する自信を失わせるところがあった。しかし、一九六〇～七〇年代後半の経済成長の時代が、そのようなスウェーデン人の確信あるいは価値観を成長させている。それは同時に、²³意識や自民族中心主義の形成の条件が整ったことを意味し、かつスウェーデン人が多くの移民労働者と接して、その文化に對するステレオタイプを形成するにいたる時代でもある。

それまで異文化は外国にあるもの、国内文化は純粋なものと考えるところのあったスウェーデン人が、自分たちの文化に影響を与えかねないものとして、流入する文化を感じ始めたこともある。

フィンランド文化について、スウェーデン人は自分たちの独自の文化に對する脅威とはなり得ないと感じていたふしがある。フィン人の行動、態度もその一因であるが、これまでの両国の歴史が、スウェーデン人にフィン人に對するある意味での優越感を育てたと言うべきである。

註

(1) Hecksher, E.F.: *Svenskt arbet och liv*. 1957. Stockholm. pp. 119-126.

(2) Swanberg, I & Runblom, H.: *Det mangkulturella*

- Sverige. in *Det mangkulturella Sverige* (DMKS).
p.9. 1988. Stockholm.
- (3) Mead, W.R.: *Finland*. pp.102-105. 1968. London.
- (4) Bacon, W.: *Finland*. p.90. 1970. London
- (4a) de Geer, E. & Wande, E.: *Finnar*. DMKS. P.90.
- (5) Linblad, I. et al.: *Politik i Norden*. p.31. 1984.
Stockholm.
- (6) Sletten, V.: *Five Northern Countries Pull Together*.
1967. Copenhagen.
- (8) Klinberg, B.: Ethnocentriska säger. in Daun, A. &
Ehn, B.ed. *Bland Sverige* (BS). p.171.
- (9) Brigham, J.C.: Ethnic Stereotypes. *Psychological
Bulletin*. Vol.76:1. 1971
- (91) Velure, M.: Djävla utänning. in BS. p.182.
- (11) Le Vine, R.A. & Campbell, D.T.: *Ethnocentrism:
Theories of conflict, Ethnic Attitudes and Group Be-
havior*. 1972. New York.
- (21) Velure, M.: *Kniv, spirit och sisu. En preliminar
rapport om stereotypiseringen av finnar i Sverige*.
1979. stencil.
- (32) Velure ibid II) pp.196-200
- (4) af Klinberg ibid p.173.
- (52) af Klinberg ibid p.176-177.
- (92) Hormia, O. et al.: *De finska invandarnas problem*.
p.15. 1971. Stockholm
- (17) de Geer & Wande ibid p.97.
- (92) ibid p.102.
- (92) Sandlund, T.: *Suomenruotsalaiset*. in Valkonen, T.
et al ed. *Suomalaiset*. p.251. 1980. Jyva.
- (92) Statistisk Årsbok 1987. 1987. Stockholm.
Tabel 27. Befolkning efter medborgarskap. p.34
Tabel 30. Utrikesfödda eller utländska medborgare
efter födelseland
- (22) Ehn, B.: *Invandares stereotyper om svenskar*. in
BS. pp.230-238.
- (33) Rabbe, M.: *Sweden-----A new look*. p.15. 1989.
Göteborg.
- (33) Daun, Å.: *Svenskhet som hinder i kulturmöte*. in
BS. p.325.
- (42) Ehn, B. ibid 22) pp.237-238.

- (25) *ibid.* pp.238-240.
- (26) Zegarac, P.: *ATT BLI AKTA SVENSK.* 1982. Stockholm.
- (27) W.フライマンホルスト著 矢野 創・服部 誠訳：われら北歐人 東海大学出版 1986.
- (28) Terhune, K.: *From national character to national behavior*, 1970. 筆者未見。 *ibid.* BS. p.288.
- (29) *ibid.* BS. p.266.
- (30) ツルクはスウェーデンがフィンランドを支配した時代の首都で、今も文化的中心都市の一つ。一九七〇年代はフィンランドはスウェーデンにくらべてなにごとにつけ、二十年は遅れているといわれていた。一九八五年には、この差は縮まり、多くのフィン人がスウェーデンから母国に還流した。
- (31) *ibid.* BS. p.270.
- (32) *ibid.* BS. p.275.
- (33) *ibid.* BS. p.276.
- (34) *ibid.* BS. pp.277-285.

(つくだ ひでお・人文地理学教授)